

「世界史研究推進委員会」

共同研究副題「高大連携」および「世界史への興味・関心を育む教材・指導法の研究」経過報告

新栄高等学校 大賀佐和子

今年度の活動

2023年度は、新型コロナウイルス感染症の扱いが5月8日から感染症法の5類に変わり、感染状況もいくらか落ち着いた中で活動がスタートしました。本委員会も、ほぼ例年通りの活動を続けることができました。10月の社会科部会秋季研究大会では横浜市立東高校の智野先生から「学（ぶ）力の育成の試み 歴史総合と探究科目の実践報告」というタイトルで実践報告をしていただきました。高大連携講座は、引き続き事前申し込み制を取らせていただきながらも、生徒・教員共に会場に集まる形で開催することが出来ました。3月の歴史分科会研究発表会では東欧史の中澤達哉先生（早稲田大学）に来ていただき、横須賀大津高校の松木先生から「歴史総合・世界史探究の授業実践 ― どうすれば歴史総合は1年で終わるのか」というタイトルで実践報告をしていただくことができました。これらについて詳しくは本冊子に載っていますので、ご覧いただければ幸いです。

2か月に1度の例会では、桃木至朗編著『ものがつなぐ世界史』（ミネルヴァ書房）の読書会を中心に教材や授業法の開発と研究に取り組み、『歴史総合』に関しては、日本史研究推進委員会と合同の委員会を2回開催しました。

歴史総合は2年目を迎え、世界史探究が始まりました。

『歴史総合』は、「世界史と日本史を分けない」科目として位置づけられ、「近代化」「大衆化」「グローバル化」などの概念を重視した高校における必修科目として始まりました。このため生徒が問いを表現すること、課題を解決する過程を盛り込んだり、思考力を育成するような試みを行ったりすることが重視され、『探究』科目では、『歴史総合』で行ってきた学習をさらに深めることが求められています。「歴史は暗記科目ではない」と歴史教員が主張し、生徒自らが思考し、議論することが大切なのではないか、そう考えた結果が『歴史総合』と『探究』科目に反映された面があると考えます。ただ「入試で暗記が求められる以上、授業も知識詰め込み型にならざるをえない」という我々の悩みは、依然として継続しているのではないのでしょうか。『探究』科目の登場で、『歴史総合』との接続もクローズアップされる中で、その思いを強くしました。

歴史総合は教科書ごとに内容が異なり、「授業で何をすればよいか」ということについても、我々担当する教員に大きな「問い」を投げかけてきているようです。『歴史総合』も『世界史探究』も、授業についてはこれからもますます試行錯誤が求められていくでしょう。世界史研究推進委員会は、これからも魅力的な歴史教育に向けて活動を続けて参ります。もし参加を希望して下さる先生がいらっしゃいましたら、気軽に大賀か副委員長の上野、委員会のメンバーまで気軽にご連絡ください。